

# 白花の朝顔

泉鏡花

青空文庫



「あなた、居やりますか。」

……唄にもある——おもしろいのは二十はたちを越えて、二十二のころ三のころ——あいにくこの篇の著者に、経験が、いや端的に体験といおう、……体験がないから、そのおもしろいのは、女か、男か。勿論誰たれに聞かしても、この唄は、女性の心意気に相違ないらしいが、どんなのを対手あいてにした人情のあらわし方だか、男勝手にはちよつときめにくい。ただしどう割引をした処で、二十三は女盛り……近ごろではいつそ娘盛りといつて可いい。しかも著者

なかま、私の友だち、境辻三によつて話された、この年ごろの女  
というのは、祇園ぎおんの名妓めいぎだそうである。

名妓？ いかなるもので、と問われると、浅学不通、その上に、  
しかるべき御祝儀を並べたことのない私には、新橋、柳橋……い  
づくにも、これといつて容式をお目に掛ける知己ちかづきがない。遠い  
が花の香と諺ことわざにもいう、東京の山の手で、祇園の面影を写すので  
あるから、名妓は、名妓として、差支えないであろう。

また、何がゆえに、浅学不通まで打ちまけて、こんな前書をす  
るかといえば、実はその京言葉である。すなわち、読みはじめに  
記した「あんた、いやはりますか。」——は、どう聞いても、祇  
園の芸妓げいこ、二十二、三の、すらりと婀娜あだな別嬪べっぴんのようじゃあな

い。おのぼりさんが出でつくわ会した旅宿万年屋でござる。女中か、せいぜいで——いまはあるか、どうか知らぬ、二軒茶屋で豆腐を切る姉さんぐらいにしか聞えない。嫋じょうおん音、嬌きょうせい声、真ならず。境辻三……巡礼が途まじに惑つたような名の男の口から、直接じかに聞いた時でさえ、例うぐいすの鶯の初音などは沙汰さたの限りであるから、私が真まね似ると木菟みみずくに化ける。第一「あんた、居やりますか。」さて、思うに、「あの、居なはるか。」とおとずれたのだから、それさえさだか的確ではないのだそうであるから、構わず、関東の地声でもつて遣やッつける。

谷の戸ではない、格子戸を開けたときの、前記の声が「こんちは、あの……居らっしゃいますか。」と、ざつとかわるのである

ことを、諸賢に御領承を願つておいて……

わが、辻三がこの声を聞いたのは、麴町こうじまち——番町も土手下

り、湿しけた崖がけ下したの窪地くぼちの寒々とした処であつた。三月のはじめ、

永い日も、午ひるから雨もよいの、曇り空で、長屋建の平屋には、し

かも夕暮が軒に近い。窓下の襖ふすまぎわ際ぎわで膳ぜんの上の銚ちようし子こもなしに

——もう時節で、塩のふいた鮭さけの切身を、鱧はもの肌の白さにはかな

みつつ、辻三が……

というものは、ついその三四日まえ以前まで、ふとした事から、天て

狗いぬに攫さらわれた小坊主同然、しかし丈高く、面赤つらき山伏という処を、

色白やせしにして眉まゆの優やさい、役者のある女形に誘われて、京へ飛んだ。

初のぼりだのに、宇治も瀬田も聞いたばかり。三十三間堂、金閣

寺、両本願寺の屋根も見ず知らず、五条、三条も分らずに、およそ六日ばかりの間というもの、鴨川かもがわの花の廓くるわに、酒の名も、菊、桜。白鶴はくつる、富久娘ふくむすめの膏あぶらを湛たえた、友染ともぞめの袖そでの池いけに、錦にしきの帯の八橋やっばしを、転まげた上で泳ぐがごとき、大それた溺おぼれよう。肝きも魂たまも泥すつぽん亀かめが、真鯉まごい緋鯉ひごいと雑魚ざつぎょ寝ねとを知しつて、京女の肌みを視みて帰かえつて、ぼんやりとして、まだその夢の覚さめない折まから。……

無理もない、冷飯ひやめしに添そえた塩鮭しほをはかなむのは。……時に、膳ぜんの上に、もう一品ひとしな、惣菜そうざいの豆まめの煮にたやつ。……女難にょがたにだけは安心あんしんな男おとこにも、不思議ふしぎに女房にようばうは実意じついがあるから、これはそこらの、あやしげな煮豆屋にまめやが、あんぺらの煮出にでしを使つかつた悪甘あくあまいのではない。砂糖さとうを奢おごつて、とろりと煮に込んで、せつせと煽あおいで、つやみ

を見せた深切な処を、酔覚よいざめの舌の尖さきに甘く染しまして、壁にうつる影法師も冷たそうに縮んだ処へ。

ころころと格子が開いた。取次の女中へ何かいう、浅間な住居すまいで、手に取るような、その「あんたはん、居やりますか。」訳して、「こんちは、あの、居らっしゃいますか。」のそれだったのだそうである。

## 二

「京の祇園と、番町の土手下——いや、もうちつと——半道ばかり近いのです。大勢の中で、その芸妓げいしや——お絹というんです——



その女が、京都駅まで、九時何十分かの急行を、見送りに来てくれたんだから。……それにしても少々遠過ぎますね。——声を聞いて、すぐそのお絹だ、と思ったのは。

しかし事実なんです。

(やあ、これは珍客。)

とか、大きな声して、いきなり、箸はしをおくと、件くだんの煮豆を一つ、膳の上へ転がしながら、いきなり立上って中縁のような板敷へ出ましたから。……ひよどりなんてん鴨鴨が南天燭やまがらの実、山雀くるみが胡桃ですか、いつそ鶯つぼみが梅の蕾つぼみをこぼしたのなら知らない事——草稿持込で食っている人間が煮豆を転がす様子では、色恋の沙汰ではありません。——

——それだのに……」

境辻三は、串戲じょうだんではなさそうに、真顔になつていったので

ある――

「しかし、またあらためて、お絹のその麗うつくしさというものは。――

――（お危うございます、ここは暗いんでございますから。）おい

それものの女中めが、のつけのその京言葉と、朱鷺色ときいろの手絡てがら、艶つ

やつややつや々した円鬘まるまげ、藤紫とうむらさきに薄鼠うすねずみのかかった小袖つまの褻つまへ、青柳を

しつとりと、色の蝶ちょうが緑を透すいて、抜けて、ひらひらと胸へ肩へ、

舞立まいだてつたような飛模様とびようを、すらりと着きこなした、長襦袢ながじゆばんは緋ひに

総染そうぞめの小桜こざくらで、ちらちらと土間どまへ来た容子ようすを一目、京都から帰

つたばかりの主人あるじが旅さきの知己ちかづき、てつきり溶とろけるものと合点

して、有無あやうを部屋へ聞きかないさきから、すぐこうお通りはいいの

ですが、口上くしやくが癩しかですよ。（真暗まつくらですから。）が、仕方がない、押付けおっつけ仕事の安普請やすびしんで、間取りに無理がありますから、玄関の次が暗いのです。いきなり手を曳ひいて連れ込んだ、そのひき方がそそつかし屋で荒いので、私と顔を会わせた時は、よろけ加減で、お絹の顔が、ほんのりとなつて、その長襦袢すそのしなやかな裳すそをこぼれた姿は、脊は高し、天井の黒い雲から糸桜いとざくらがすらすらと枝垂しだれたようで、いや、どうも……祇園の空から降つて来たかと思われしました。

——時に、重ねていうようですが、三月のはじめです。三月といえはやよい弥生やよいです。桜は季節でありますけれども、まだどこにも咲いてはいません。ところが、どうした事か、これから、宵、夜、

夜中に掛けて、話を運びます、春木町の、その頃の本郷座。上野の山内さんない、清水きよみずの観音堂。鶯谷うぐいすだにという順に、その到る処、花が咲いていたように思います。唯ただいま今も、目に見えて、桜に包まれるようですが、実は、こんな事は、今まで、誰にも片端も饒し舌やべつたことはありませんから、いつも一人で、咲満ちた花の中にいた気だったのですけれども、あなたに。」

著者に、いうのである。

「三月、と口にしますと同時に、ふと気がつくくと、彼岸ずつと前で、まだ桜は咲きません。が、それからお絹を連れて行きました、本郷座の芝居が、ちようど祇園の夜桜、舞台一面の処へぶつかりましたし、続いて上野でも、鶯谷でも、特に観世音みせうの御堂では、

この妓おんなと、花片はなびらが颯さつと微醉ほろよいの頬ほに当るあるように、淡いうす薫かおりさえして、近々と、膝ひざを突つ合あわせたような事ことがありましたから、色いろの刺さ激げきで、欄干らんかん近い、枝えだも梢こずえも、ほの紅あかかつたのだらうと思おもわれます。

ところで——芝居ゆき行ゆです。が、どの道みち、糸錦いとにしんの帯おびで押立おしだてよく、羽織はねおりはなしに居ゐずまいも端正きちんとしたのを、仕事場しごとばの机つくえのわきへ据すえた処ところで、……おなじ年としごろの家内うちが、糠味ぬかみそ噲あいじりの、襷たすきをはずして、渋茶しぶちやを振舞ふりまつてみた処ところで、近所きんじよの鮓すしを取とつた処ところで、てんぷら蕎麦そばにした処ところで、びん長ながまぐろ 鮪さしみの魚いさな軒のりごときで一銚子いちやうしといつた処ところで、京きやうから降くだつて来きた別嬪べつぴんの撰待せんたいらしくはありませない。

京きやうでは、瓢亭ひょうていだの、西石垣さいせきぎのちもとだのと、この妓おんなが案内あんないをしてくれたのに対たいしても、山谷さんや、浜町はまちやう、しかるべき料理屋りやういやくへ、

晩のご飯という懐中ふところはその時分なし、今もなし、は、は、は、は、  
笑ったつて、ごまかせない。

（おつれは？）

ただ一人で訪ねて来て、目の前に斜ななめすわに坐っている極彩色に、連つれ  
を聞いたも変ですが、先方さきの稼業が稼業ですから。……なぞとい  
つて、まじくないながら、とつおいつのうち、お絹が、四五人で  
客に連れられて来たのだけれど、いまは旅館に一人で残った……

（早う、あんたはんの許とこへ来とうて、来とうてな。）

いよいよ、天麩羅てんぷらでは納まらない。思いついたのが芝居です。

で、本郷に出ているのは、箕原路之助みはらみちのすけ——この友だちが、つ

い前日まで、祇園で一所だったので、四条の芝居を打上げた一座

が、帰つて来て、弥生興行の最中だと思ひ下さい。

(……すぐ出掛けましょう、御婦人には芝居と南瓜とうなすが何よりの御馳走だ。)

馬鹿も通越した、自棄やけもんくな言句を切出して、

(ごひいき鬣の路之助が出ています。)

役者を鬣とさえいつておけば間違ひはないもの——その実、

祇園にいたうちに、五人、八人、時には十人にも余つて、その六日ばかりの間、時々出入り交代かわりはあつても、ほとんど同じ顔の芸妓いしや舞子が、寝る、起きる、飲む、唄う。十一時ごろに芝居のは

ねるのを宵の口にして、あけ方の三時四時まで続くんでしよう。

雑魚寝の女護の島で、宿ふつかよい酔あざらしの海豹うっとりが恍惚と薄目を開ける

と、友染を着たかもめ鴫のような舞子が二三羽ひらひらと舞込んで、眉を撫なでる、鼻を掴つまむ、花簪はなかんざしで頭髪かみのけを搔かく、と、ふわりと胸へ乗のつて、搔かいまきまきの天鷲てんじゆ絨じゆの襟えりへ、笹色ささいろの唇くちびるを持つて行くのがある。……いいえ、その路之助のですよ。女形の。……しかも同じ衾ふすまの左右には、まくれたり、はだかつたり、白い肌が濡れた羽衣ういに包かまれたようになって、紅くれないの閨ねやの寢息ねいきが、すやすやと、春風のこ小枕こまくらに小波こなみを寄よせている。私はただ屏風びやうぶの巖いわに、一介いっけいの榮さ螺ざえのごとく、孤影けいげん瑩えい然ぜんとして独り蓋ふたを堅かくしていた。とにかくです、昼夜とも、その連中に、いまだかつて、顔を見せなかつたのが、お絹なんです。

——晩には、東京へ帰ろうとする朝でした。旅馴なれないので、



何となく心が急せきます。早めに起きた右の栄螺が、そつと蓋をあけて、恐る恐る朝日に映る寝乱れた浮世絵を覗のぞきながら、二階を下りて、廊下を用たしに行く途中、一段高く、下へ水は流れませんが、植込の冷い中うちに、さらさらと笄かけひの音がして、橋づくりに渡りを架かけた処があつた。

そこに、女中……いや、中でも容きりよう色よしの仲居にも、ついぞ見掛けたことのないのが、むぞうさな束たばねがみ髪かみで、襟脚がくつきり白い。大島おおしまがすり緋しまちりめんに縞縮緬の羽織を着たのが、両袖を胸に合せ、橋際の柱に凭もたれて、後姿で寂しそうに立っている。横顔をちらりと視みて通る時、東山の方から松風が吹込んだように思いました。——これが、お絹だったので。

あとで聞くと、病気で休んでいて、それまでの座敷へは出なかつた。髪を洗ったのもやつと昨日きのうで、珍らしい東の客が、今日帰る、と聞いたので、急いで来たが、まだ皆夜中らしいから、遠慮をしていたのだというのが分りました。けれども、顔を洗って、戻るのに、まだおなじところに、おなじ姿を見ると、ちよつと二間ばかりの橋が、急にすらすらと長く伸びて、宇治か、瀬田か、昔話の長橋の真中まんなかにただ一人怪しい婦人おんなが、霞たたずにゐんだようですから、気をはつきりと、欄干を伝うところを、

(目々、覚めてどすか。)

と清すずしい目で、ちよつと見迎えて、莞爾にっこりしたではありませんか。私は冷ひやりとしました。第一、目々が覚めたという柄じゃない、

洗つて来い、という面つらです。

閑静しずかだから、こつちへ——といつて、さも待設けてでもいたよ  
うに、……疏水そすいですか、あの川が窓下をすぐに通る、離座敷へ案  
内をすると、蒲団ふとんを敷かせる。乗ったんですが、何だか手玉に取  
られた形で、腰が浮くと、矢の流れで危いくらい。が、きつぱり  
と目の覚めた処で、お手ずから、朝茶を下さる。

(姉さんは、娘いとはんですか、此楼こちの……)

いやな野郎で、聞覚えの京言葉を、茶の子でなしに嚙かじりました  
が、娘か、と思つたほど、人がらが勝まさっている。……

通力自在、膳も盃はいせん洗せんもすぐ出る処へ、路之助が、きちんと着  
換えて入つて来て、鍋なべのものも、名物の生湯葉なまゆば沢山に、例の水菜、

はんぺんのあつさりした水煮で、人まぜもせず、お絹が——お酌。  
 (ずつと見物をおしやしたか。)

宇治は、嵯峨<sup>さが</sup>は。——いや、いや、南禅寺から將軍塚を山づた  
 いに、児ヶ淵<sup>ちごふち</sup>を抜けて、音羽山清水<sup>きよみず</sup>へ、お参りをしたばかりだ、  
 というと、まるで、御詠歌はんどすな、ほ、ほ、ほ、と笑う。

路之助が、

(その癖、お絹さん、お前さんの好きそうな処ばかりだぜ。……  
 境さん——この人は、まだ休んでいて隙<sup>ひま</sup>ですから、そこいら、御  
 案内をしようというのですが、どうかすると、神社仏閣、同行<sup>どうぎよ</sup>  
 一人<sup>うににん</sup>の形になりかねませんよ。)

(巡礼結構。同行二人なら野宿でもかまいません。)

(ほ、ほ、ほ、よういわんわ。)

御免下さい。……だから言わないことではない。もうこの辺の、  
語義の活法が覚束おぼつかない。

が、串じょうだん戯おぼつかではありません、容色きりよう、風采とりなりこの人に向つて、

つい(巡礼結構)といった下に、思わず胸のせまることがあつた  
のです。――

ですから、嵯峨へ、宇治へというのを断ことわつて、朝出ると、すぐ  
三十三間堂やしろ。社やしろもうで、寺まいり。何なにしろ食つたものさえ、水  
菜と湯葉です。あの、鍋からさらさらと立つた湯気も、如月きさらぎの  
水を渡る朝風が誘つたので、霜なびが靡なびいたように見えた、精進腹、

清浄なものでしよう。北野のお宮。壬生みぶの地蔵。尊もかつたり、寂しかつたり。途中は新地の赤い格子、青い暖簾のれん、どこかの盛場の店飾も、活動写真の看板も、よくは見ません。菜畠なばたけに近い場末の辻ひだまの日溜りに、柳の下で、鮎ふなを売る桶おけを二人で覗いて、  
 (みんな、目あいていやはるな。)

といった、お絹の目が鯉こいの目より濡ぬれぬれ々としたのが記憶にある……といった見物で。——帰途かえりは、薄暮くれがたを、もみじより、花より、ただ落葉を鴨川へ渡したような——団栗橋どんぐりばし——というのを渡つて、もう一度清水へ上つたのです。まだ電燈にはならない時分、廻廊とうろうの燈籠とうろうの白い蓮華れんげの聯つらなつたような薄あかりで、舞台に立った、二人の影法師も霞んで高い。……

暗い磴いしだかの幽かすかな底に、音羽の滝の音を聞いた時は、

松風に音羽の滝の清水を

むすぶ心やすすしかるらん

地唄の三味線は、耳に消えて、御詠歌の声をさながらに聞きま  
すと——はてな、なぜか今朝、起きぬけに、祇園の茶屋の橋がか  
りで笈かけひの音のした時と、お絹の姿も同じようで、一日を夢に見た  
ように思いましたか——

——更に、日もおかず、お絹が土手番町へ訪ねて来た、しかも  
その夜、上野の清きよみず水の御堂みどうの舞台に、おなじように、二人で立  
つ事になったんです——

音羽のその時は、風情がいいから、もう一度、団栗橋を渡り返した、京洛らくちゆう中と東山にはさまって、何だか、私どもは小さな人形同然、笹舟ささふねじゃあない、木の実のくりぬきに乗って、流れついた気がします——

そうですね、宿は西石垣さいせきぎのなにかし屋に取ってあったのですが、宿では驚いていたでしょう。路之助の馳走になりつつげで、おのぼりの身は藻抜の殻で、座敷に預けたのが、擬更紗まがいさらせの旅袋たった一つ。

しわす、晦つごもりの雪の夜に、情なさけの宿を参らせた、貧家の衾ふすまむしろの筵むしろの中に、旅僧が小判になっていたのじゃない。魔法妖術まほうようじゆつをつかうか知らん、お客が蝦蟆がまに変じた形で、ひよこんと床間とこのまに乗って



いる。

お絹が引添つての、心づけでは、電話で、もう路之助から、この勘定は済んでいる。まだ、それよりも、お恥かしいやら、おかしいのは……

（——お絹さん、その手提袋ですがね、中味が緊張しておりますせん、張合のないせいか、紐ひもが自おのずから、だらりとして、下駄のさきとすれすれに袋が伸びていたそう。京都へ着いた時迎いに来てくれました、路之助の番頭と一所だった年増の芸妓げいしやが、追つて酒宴の時、意見をしてくれましたよ。あれは見つともない、先陣の源太はんやないけど、腹帯ゆるが弛ゆるんだように見える……といつてね

。）

(ほんに、私も、東の方最<sup>あて</sup>辰どす……しつかりとあんじょうに……)

——細い指であやつつて、あ、着換を畳もう、という、待<sup>もてな</sup>遇  
振<sup>ぶり</sup>。ですが、何にもない。着のみ、着のまま、しゃんと結ば  
ると袋はぺしやんこ。そいつを袖で抱いて、さ、晩のご飯を近所  
のちもとへ、と立たれたのには、懐<sup>ふところ</sup>中もぺしやんこです。

これも路之助の心づけで、ちゃんと席を取つて支度が出来てい  
て、さしむかいで、酒になった処へ、芝居から使の番頭、姓氏あ  
り。津山彦兵衛とちよつとお覚え下さい。

(——すぐ、あとで、本郷座の前茶屋へ顔を出しますから——)  
花柳界の総見で、楽屋は混雑の最中、おいでを願つてはかえつ

て失礼。お送りをいたすはずですが、ちょうど舞台になりますか  
ら。……縞の羽織、前垂掛だが、折目正しい口上で、土産に京人  
形の綺麗な島田と、木菟みみずくの茶羽ねりの練もの……大鼻肩の鳥で望ん  
だのですが、この時は少々くすく擦ったかった。やがて、その京人形に、  
停車場まで送られて、木菟が。……夜汽車で飛ぶ。」……

## 三

「いらつしやいまし、ようこそ。——路之助も一度お伺い申した  
いと、いいいい、帰京早々けいこ稽古にかかつて、すぐに、開けたもの  
でございますから、つい失礼を。……今日こんにち日はまたどうも難有ありがと

う存じます。」

「御挨拶ごあいさつで恐縮ですよ。津山さん。私こそ、京都で、あんなにお世話になつて。——すぐにもお礼かたがたお訪ね申さなければならなかつたのですが、ご存じの、貧乏稼いんぱんぎにかまけてね。」

「なぞとおつしやる。……は、は、は。」

と笑いを手で蓋ふたして、軽く咳せきした。小肥こふとりにがつしりした年配が、稼業で人をそらさない。

「まったくですよ。ところでですね。ぶちまけた話ですが、万事、ちつとでも、楽屋の方で御心配を下さらないように——実は売場で切符を買つてと思いましたがね。」

「そんな水臭いことを……ご串じょうだん戯でで。」

「いや、ご馳走は、ご馳走。見物は見物です。実は、この京人形。」

お絹が上品な円鬘まるまげで、紫仕立の柳棲やなぎづま、茶屋の蒲団に、据えたようにいるのです。

「たしか、今度の二番目の外題げだいも、京人形。」

「序幕が開いた処でございまして、お土産興行、といった心持でござんしてな。」

「そのお土産をね、津山さん、……本箱の上へ飾つてある処へ……でしょう。……不意でしょう。まるで動いて出たようでしょう。並んでいる木菟みみずくにも、ふらふらと魂が入ったから、羽ばたいて飛出したと——お大尽だいじんづきあいは馴れていなさるだろうから、

一つ、切符で見ようじやありませんか、というと、……嬉しい、  
 といつて賛成は、まことに嬉しい。当方立たちどころ処ふところに懐中が大き  
 くなった。」

「は、は、は。」

と蓋ふたして、軽く笑う。津山の懐中ふところの方が余程大きい。

「木戸へ差しかかると満員、全部売切れ申候だから、とにかく、  
 連中で来て、一二度知つてるので、こちらに世話を掛けたんです  
 が、つれがつれです、快よくあしらつてはくれましたけれども、  
 何分にも、ぎっしりで、席は一つもないというんで、止やむを得ず  
 ……悪く思わないで下さい……まったく止むを得ず、茶屋から、  
 楽屋へ声を掛けてもらつたんですから。しかし、大入で、何より

結構。」

「お庇かげ様さまで、ここん処、ずっと売切っております。いえ、お場

所は出来ません。いえ、決して無理はいたしません。そのかわり、

他ほか様さまと入いれ込みごみで、ご不承を願うかも知れません。今日の処は、

ほんの場の景気をお慰みだけ、芝居あは更あらめてお見直しを願います

でございますので。……つきましては、いずれ楽屋へもお供をいた

しますが、そのおつれ様……その、京人形様。——は、は、は——

——の処は、何にもおつしやらず、ご内分に。——いえ、あなた様

のおつれでございますから、仔細しさいはないのでございますがな、こ

の役者なかと申しますものは、何かとそのつきあいがまた……

煩うるさいのでして、……京から芸げい妓こはんが路之助おいかを追駈おけて逢あいに来

たわ、それ蕎麦そばだ……などと申すわけで、そうでもないのに、何かと物騒、は、は、は。」

両三度、津山の笑いは、ここで笑うのにあらかじめ用意をしたらしいほど、式かたのごとく、例の口許くちもとをおさえて、默然だんまりを暗示しながら、目でおどけた。

「……は、は、は、と申すわけで。お含みを。——ああ、八さん、お茶を入れかえて……そう、宜よろしい。何、ぼくにか、はて、忙しい。は、は、は。いやいずれ今ほど。——お場所が出来ましたそうですね。」

膝すべで這はって、津山が立つのと入交いれかわって、男衆が階子段はしごだんの口でお辞儀をして、



「では、ご見物を。」

「心得た。」

見ますとね、下の店みせ前に、八角の大火鉢を、ぐるりと人間の巖いわのごとく取巻いて、大おお髻たぶさの相撲連中九人ばかり、峰そばを聳たて、谷ひらを展ひらいて、湯ゆのみ吞のみで煽あおり、片口、井、谷川の流れるように飲んでゐる。……何しろ取込んで忙しそうだ、早いに限ると、外がいと套うを脱いだ身軽です。いきなり下りると、

「へい、行つてらつしやいまし。」

帳場で女の声がしたかしないに、

「危い！」

わツと響くのが一いつとき斉で、相撲が四五人どツと立つた。いずれ

も大ものですから、屋鳴り震動の中に、幽かすかに、トンと心細い音が、  
 と見ると、お絹のその姿が階子段はしごだんの上から真横になつて、くる  
 くるトトトン、褓つまがばツと乱れて、白い脛はぎ、いや、祇園での踊手  
 だと聞く、舞で鍛えた身は軽い、さそくの躡たしなみで前褓まえづまを踏みぐ  
 くめた雪なす爪つまさき先が、死んだ蝶のように落ちかかつて、帯の糸  
 とにしきくすだまひるがえ錦が葉玉こぼに飜ると、溢れた襦袢じゆばんの緋桜ひざくらの、細な鱗こまかうろこのご  
 とく流れるのが、さながら、凄せい艶えんな白蛇はくじやの化身の、血はに剥はが  
 れてのた打つ状さまして、ほとんど無意識に両手を拵ひろげた、私の袖へ、  
 うつくしい首あおのが仰向けになつて胸へ入り、櫛くしこうがい 笄ががきらりとし  
 て、前髪よりは、眉ぶんが芬ぶんと匂うんです。そのまま私の首筋に、袖  
 口が熱くかかったなり、抱き据えて、腰をたてにしたまで、すべ

て、息を吐く隙がない。息を吐く隙がありません。

土俵が壊れたような、相撲の総立ちに、茶屋の表も幟を黒くした群衆でしょう。雪は降りかかって来ませんが、お七が櫓から倒に落ちたも同然、恐らく本郷はじまって以来、前代未聞の珍事です。

あまりの事に、寂然とする、その人立の中を、どう替草履を引掛けたか覚えていません。夢中で、はすに木戸口へ突切りました。お絹は、それでも、帯も襟もくずさない。おくれ毛を、掛けたばかりで、櫛もきちんと挿っていました。背負上げの結び目が、まだなまなまと血のように片端垂つて、踏みしめて裙を庇った上前の片褻が、ずるずると地を曳いている。

抱いて通ったのか、絡もつれて飛んだのか、まるで現うつで、ぐたりと肩に凭よつかかたまま、そうでしょう……引息ほっを吻と深く、木戸口で、

「ああ、お婿はん。」……

と泣くようにいった。生死の最中、洒落しやれどころではないのですが、これは京都で、連中が、女形の客だといっているので（お婿はん、お婿はん。）と私を、からかったのが、つい出ました。

「……わて、もう、死ぬるか思うた。」

と、目が澄んで、熟じっと視みて、颯さつと顔色が蒼あおざめたんです。

「あんたはんに恥を搔かせた、済まんなあ、……生命いのちの親え。」

「……………」

「二階を下りしなに、何や暗うなつて、ふらふらと目がもうて、……まあ、私あて、ほんに、あの中へ落ちた事なら手足が断ちぎれる。」  
という声も、小刻みで東へ廻る。茶屋の男は木戸口に待つていたが、この上極きまりを悪がらせまい用心で、見舞もいわない、知らん顔で……ぞろぞろついて来た表口の人だかりを、たツつけを穿はいた男が二人、手を挙げて留めているのが見えました。

そツと屈かがんで、

「へい、こちらへ。」——

土間、棧敷、二、三階、ぎつしり一杯。成程、やっと都合がついたのだと見えて、四人詰め、上下大島づくめなのと、背広の服のと、しかるべき紳士が二人いましたが、これが、そのまま、

腰に瓢箪ひょうたんでもつけていそうな、暖簾のれんも、景気燈けいきあかりも、お花見気分、紅あかい靄もやが場内一面。舞台は、切組、描割で引包んだ祇園の景色。で、この間、枝ぶりを見て返ったばかりの名木の車輪桜が、影の映るまで満開です。おかしい事には、芸妓げいしや、舞妓まいこ、幫間ほうかんまじり、きらびやかな取巻きで、洋服の紳士が、桜を一枝——あれは、あの枝は折らせまい、形容でしょう。——もう一人、富豪——成金らしい大島揃ぞろいが、瓢箪をさげている。

一つ棧敷——東のずっと末でした——その妙に、同じような先客が、ふと気がさしたと見えて——挨拶をした時は、ふり向きもしなかつたのが——お絹をこの時見返つて、愕然がくぜんとした様子です。……

ところで、何でも、その桜の枝と、瓢箪が、幫間の手に渡るのをきつかけに、おのおの賑にぎやかなすて台辞ぜりふで、しも手ですか、向つて右へ入ると、満場ただ祇園の桜。

花咲かば告げ

むといいし山寺の……

ここの合方は、あらゆる浄瑠璃、勝手次第という処を、囃はやし子に合わせて謡が聞える。

使は来たり馬

に鞍、鞍馬の山のうず桜……

「牛若の仮装でも出ますかね、私は大の鼯あぎ鼠げです。」

恥ちずべし、恥ちずべし。……式亭三馬嘲あざける処ところの、聾つんぼ棧さしき敷しきのとんちちきを顯あらわすと、

「路之助はんが、出やはるやろ。」

お絹の方が知っている。ただしこの様子では、胸も痛めず、怪  
 我はしない。

しやり、り、揚幕。艶麗えんれいにあらわれた、大どよみの掛声に路

之助扮ぶんした処の京の芸妓げいこが、襟裏のあかいがやや露呈あらわなばかり、

髪かみ容かたち着つけ万端。無論友染の緋ひ桜縮緬くらちりめん。思いなしか、顔

のこしらえまで、——傍かたわらにならんだのとそつくりなのに、豊棧敷

一驚きつを吃する処に、一度姿を消した舞妓が一人、小走りに駆け戻

るのと、花道の、七三とかいうあたりで、ひつたり出会う。何で

もお客が大変待まちあぐんで機嫌が悪い、急いで迎いに、というので

す。

路之助の姉芸妓あねげいしやが、おおしんど、か何かで、肩へ色気を見せ



たのですが、

「えろう遅うなつて、ご苦労え、あのな、ついそこで、いえ、あのな、むこうへ、……境はん。」

おや。

「あんたも知つてやる。境はんが来やはつて、逢いとう逢いとうていた処やろ、それやよつて。」

とこつちを視て莞爾。（み　にっこり）——

「いやや、驕（おご）んなはれ。」

と舞妓が（いれかわ）入交つて、トンと揚幕の方から路之助の脊筋を（たた）敲いた。

「おお、晴がまし。」

お絹が、階子段を転げた時から、片手に持っていた、水のように薄色の藤紫の肩掛ショオルを、俯向うつむいた頬へ当てたのです。

——舞台、舞台ですか……

舞台どころじゃありません。その時うしろの戸が、悪く、静かに開いたと思うと、この、私の背中を、トンと、誰か、ぐにやりとした手で敲いたんですから。

いま、戸が開いたと思うと同時に、可厭いやな気味合の冷アい風が、すうと廊下から入って、ちり毛もとに、ぞツと沁しみみたまも道理こそ、十九貫と渾名あだなを取る……かねて借金があつて、抜けつ潜くぐりつ、す

つぽかしている——でぶでぶした、ある、その、安待合の女房が、餡あんこ子入いりの大廂おおひさし髪で、その頃はやった消炭けしずみ色紋付の羽織えの衣

紋もんを抜いたのが、目のふちに、ちかちかと青黒い筋の畳まるまで、  
 むら元はげのした濃い白粉おしろい、あぶらぎった面つらで、ヌイと覗のぞ込んで、  
 「大した勢いでございますのね。」

「ちよつと……出よう。」

……ですもの、舞台どころですか。——

「結構ですわ、ほんとに境さん、ご全盛で。」

「串じょうだん戯ごだろう。」

「役者があなた、この大入おおいりに、花道で、名前の広告をするんだ  
 もの。大したものでなくってさ。」

と、くくり頤あごを揺ゆつて、しゃくる。

「あれは洒落しやれだよ、洒落も洒落だし、第一、この人数だ、境とい

うのは。」

売店があるから、ずんずん廊下を反れました。

「何も私一人というんじやあなかろう。」

「うんえ、あの台辞せりふで、あなたの棧敷を見て笑ったのを見て、それで気がついた、あなたの来ているのが。……といったわけなんですもの、やすい祝儀じやでけんでねえ。」

と、どこかのなまりが時々出る。

「馬鹿を言いたまえ、路之助は友だちだぜ。——おかみさん、知ってるじゃないか。」

「それは存じておりますがね、ご全盛には違いますね。何しろ、しがない待合を、勘定で泣かせようという勢いではありませんで

す。」

ないが上にもないものを、ありあまつてでもあるように。催促の術てをうらがえしに、敵は搦手からめてへ迫つて危い。

「一言もない。が、勢いだの全盛なぞは、そつちの誤解さ、お見違えだよ。」

「見違えましたよ、ほんとうに。」

と衣紋をたくして、

「大した腕だよ、見上げたあよう。」

「何が。」

「なにがじゃあないじやないかね、といたくなるよ。ふんとうに。……新橋柳橋、それとも赤坂……ご同伴は。」

「……………」

「ちよつと見掛けませんね、あのくらいなのは。商売がらお恥かしいんだけれど……三千歳みちとせおいらんを素人づくりに……おつと。」

と両袖つっぱを突張つて肩でおどけた。これが、さかり場の魔所まところのよ  
うな、廂ひあわい合あひから暗夜やみが覗のぞいて、植込うゑこみの影のさす姿見の前まへなんで  
すが。

「芸妓げいしやにしたという素敵すてきな玉たまだわ……あんなのが一人、里さとにいれ

ば、里さとの誉うたれ、まあさね、私のうちへ出入でいりりをすれば、私の内うちの  
名な聞きですのよ。……境さかいさん、貸借かしかりも、もとは味方あつち、勘定かは

勘定か、ものは相談さうだん、あなたとはお馴染なじみじやありませんか。似合にあつ  
たよ、恐れ入おそったよ、ものになつてる、容子ようすがね。うんねさ、だ

からさ、一度連込んでおいでなさいよ。早い話が……今夜、これから帰りにさ。水打った格子さきへ、あの紫が裳すそをぼかして、すり硝子の燈あかりに、頸えりあしをくつきりと浮かして、ごらんなさい、それだけで、私のうちの估券こけんがグツと上りまसान。

かぶとちよう

兜 町の、ぱりぱりしたのが三四人、今も見物で一所ですがね。すぐ切上げてもいいんですの。ちよつと一座敷、抜け荷を売りにや……すぐに三十と五十さ、あなた。あなたの遊興あそびは、うわになるわ。

もう一息、目を眠つて、——直さん……」

（——直さんの意味詳つまびらかならず。談者、境氏に聞かんとして、いまだ果さざる処である——）

「ね、色悪で、あの白々とした甘いうま膚はだを貸すとなりや、十倍だわ。

三百、五百、借金も勘定も浮いて出るじゃあないかねえ。」

酒と、女か、目にも口にも借りのある、聾棧敷のとんちきも、むらむらとして、我ながら姿見に色が動いた。

「何をいつてるんだ——同つれ伴はないよ。」

「あら。」

「誰も居やしない。」

「まあ。」

「私一人じゃあないか。」

「おやおやおや。」

「何を見たんだ。」



「ふん、しらじらしい、空ツとぼけもいい加減になさい。あなたがそういう了りようけん簡なら、いいから私は居催促をするから、ここへ坐つちまいますから、よござんすか。」

これこの十九貫、廊下へ、どすんと坐りかねない。

「仕方がない、じゃあ、ほんとうの事をいおう。」

「いわないでさ。そして、ちよつと顔を貸しますか、それとも膚はだを……」

「顔にも、膚にも……それは煙けむだ。」

「またかね、居催促ですよ、坐りますから。」

「あれは霞かすみだ、霧なんだよ。」

「煙草たばこのかねえ。」

「いや芸妓げいしやの……幽霊だ。」

「ええ。」

「この大入に、けちでもつけるようで可厭いやだから、いいたくはなかつたんだが、どうもそうまでいわれりやしかたがない。三千歳を素人とか、何とかいったね、それだ、そつくりだ。そりや路之助に憑つき絡まとつてる幽霊だ。いいえ、憑つきものは、当人の背中に負おぶふつているとは限らない——

実は祇園の芸妓だがね、私がこの間、彼地あつちへ行つていたもんだから、路之助が帰るのに先廻りをして、私を使つて来たらしい。またかと思う。……今いわれた時も慄然ぞっとしてこの通り毛穴が立つてら。私には何にも見えないんだよ。見えないが、一人で茶屋

へ休むと、茶二つ、はたごや旅籠屋では膳が二つ、というのが、むかしからの津々浦々の仕来りしきたでね、——席には洋服と、男ばかり三人きりさ。それが、お前さんに見えたのは、幽霊に違いない。」

「ひええ。」

しめた。不断のだいくびよう大臆病。

「行つて見たまえ、のぞ覗いてごらん、さあ。それが嘘なら、きつとあそこにいやしない。いても、目には見えないから。」

「気味の悪い……いやだねえ。」

「板一枚のなかは、蒸し上るばかりのこの人数だ。幽霊だつてどうするものか。行つて覗いて見たまえ、というのに。」

あたかもそこへ、魔の手が立樹を動かすように、のさのさと相

撲の群が帰つて来た。

「それ、力士連が来た、なお氣丈夫じゃあないか。」

と、図に乗つていった。が、この巨大なる軀からだは、威おどすものにも陰氣を浴せた。それら天井を貫く影は、すつくと電燈を黒く蔽おほつて、廊下にむらむらと影が並んで、姿見に、かきなり映つた。

「ここへ来た、幽霊が。」

「ひやあ。」

「あ、力士の中に芸妓げいしやが居る。」

「きやツ、あれえ、お関取。助けてえ。」

「やあ、何じやい。」

すが縫りつかれた関取がたじろいで、

「どえらい頭ずこじゃい。棧さんだらぼつち俵法師い。」

「お絹さん——お絹さん。ちよつと。」

戸を開けて、立ちながら密そつと呼ぶと、お絹は、金煙管きんぎせるに持添えた、女持ちの嵯峨錦さがにしきの筒を襟下に挟んで、すつと立った。

前髪に顔を寄せ、

「何だか落着きません、一度、茶屋へ引揚げよう。」

#### 四

その夜も——やがて十一時——清きよみず水の石段は、ほの白く、柳

を縫つて、なかぞら中空に高く仰がる。御堂は薄墨の雲の中に、朱の柱をつら聯ね、に丹の扉を合せ、せいれん青蓮の釘かくしを装つて、棟もろとも、雪の被衣かつぎに包まれた一座の宝塔のようにきよいつく淨く厳しく聳そびえて見ゆる。

東口を上ると、薄く手水鉢ちようずばちに明りのさしたのは、ななめ斜に光を放つた舞台正面にただ一つ掲げた電燈で、樹にも土にも、靈境を照らす光明はこの一燈ばかりなのが、かえつてぶっしよく仏燭の靈を表して、くら竜燈……といつては少し冥い。しかり、明星のあまくだ天降つて、うつぱり梁を輝かしつつ、たんぺきせいらん丹碧青藍相彩る、格子に、縁に、床に、高欄に、天井一部の莊嚴を映すらしい。

見られよ、されば、全舞台に、虫一つ、塵ちりも置かず、世の創はじめの

生物に似た鱗うにぐち口も、その明星に影を重ねて、一顆いつかのだいへきぎよく碧玉みなきぎ おほろを鏤ちりばめたようなのが、棟裏に凝つて紫の色を籠こめ、扉みなきぎに漲おほろつて朧おぼろなる霞を描き、舞台に靨たなび黷くき、縁めぐを廻めぐつて、井欄せいらんに数かずうる擬宝ぎぼ珠しゆを、ほんのりと、さながら夜桜の花の影に包かんでいる。

その霞より、なお濃こまやかに、靄もやに一面ごふんの胡粉ごふんを刷はいて、墨と、朱と、藍あいと、紺こんじよう青と、はた金こんじき色の幻まぼろしを、露あみに研みいて光を沈しずめた、幾面の、額の文字と、額の絵と、絵馬の数と、その中から抜き出たのではない、京人形と、木菟みみずくは、道芝の中から生れて出たように上つたが。――

「車わかいしゆ夫おとこ、ここだ、ここでおろして。……待まちつててもらおう。」  
 俤くるまを二台、東の石段で下りたのです。

「逆縁ながら、といつては間違いかね、手を曳ひいてあげようか。

芝居茶屋の階はしご子段のお手際では、この石段は覚おぼ束つかない。」

などと、木菟が生意気にいうと、

「大事おへん、前刻さつき落ちたら、それなり、地獄え。上が清水様どすよつて、今度は転んだかて成仏どす。」

などと京人形が口を利いた。

手水鉢ちようずばちで、蔽おおいの下を、柄杓ひしゃくを搜さぐりながら、雫しずくを払うと、さ

きへ手を浄きよめて、紅べにの口に啣くわえつつ待った、手巾ハンケチの真中まんなかをお

絹が貸す……

勝手になさい。

が、こんなのが、初夜過ぎた霊場へ、すらすらと参られようは



ずはない、東の階きざはしの上には、一本ならべの軽い戸だが、柵さくのよう  
に閉ざしてあつた。

「前ぜんは、こうではなかつたはずですから……不良でも入るか知らん。」  
「こちらも不良どすな、おほ、ほ。」

「怪しからん、——向う側へ。」

と、あとへ退さがつて、南面に、不しの忍ぼずの池を真向いに、高欄の縁  
下に添つて通ると、欄干の高さに、御堂の光明が遠くなり、樹の  
根、岩角と思うまで、足許あしもとが辿たど々たどしい。

さ、さ、とお絹の褌つまさば 捌はきが床を抜ける冷たい夜風に聞えるま  
で、闐げき然ぜんとして、袖に褌に散る人ひと 膚はだの花の香に、穴のような  
真暗闇まつくらやみから、いかめの鬼が出はしまいか——私は胸しを緊めたの

です。

「まず、可<sup>よし</sup>。」

西側の、こここの階段上は、戸はあるが、片とざしで開いていた。廻廊の上を見れば、雪空でもあるように、夜目に、額と額とほの暗く続いた中に、一<sup>ひとつ</sup>処、雲を開いて、千手観世音の金色の文字が髣髴<sup>ほうふつ</sup>として、二十六夜の月光のごとく拝される。……欄干に枝をのべて、名樹の桜があるのです。

その梢<sup>こずえ</sup>、この額と相對して、たとえば雪と花の縁を、右へ取り、舞台の正面、その明星と、大碧玉の照る処、京人形と木菟が、玩<sup>お</sup>弄品<sup>もちや</sup>の転<sup>ころが</sup>ったようになって拝んだあとで、床の霞に棲を軽く、衝<sup>つ</sup>と出て、裏紫の欄干に、すらりと立った、お絹の姿は——

この時、幹の黒い松の葉も、薄霽うすもやに睫毛まつげを描いた風情して、遠目の森、近い樹立こだち、枝も葉も、桜のほかは、皆柳に見えた。

「ああ、綺麗だ。お絹さん——向い合つた不忍の御堂から、天女がきつと覗いておいでだ。」

「おお晴がまし、勿体ないえ。」

と、吃驚びっくりしたように、半ばその美しさを思つていて、羞はじたように、舞台を小走りに西口の縁へ遁にげた。遁にげつつ薄紫の肩掛で、鬚まげも鬢びんも蔽おほいながら、曲る突当りの、欄干こうきの交叉こうさする擬宝珠ぎぼしゅに立つ。

踊なれの鍊なれで、身のこなしがはずんだらしい、その行く時、一筋の風がひらひらと裾を巻いて、板敷を花片はなびらの軽い渦が舞つて通つ

た。

袖摺すれるほどなれば、桜の枝も、墨絵のなかに蕾つぼみを含んで薄うすあ

紅かい。

「そこから見えますか、秋色しゅうしきざくら桜。」

「暗うて、よう見えへんけど……先度せんど昼来ておそわった事があるよつて、どうやらな、底の方の水もせんせんと聞えるのえ。」

「音羽の滝が響くんでしようが、秋色は見えなはずだ。そこに立っているんだから。」

「またなぶらはる……発句も知らん、地唄の秋色はんて、どないしよ。」

と、振返ると、顔をかくしたままの羅うすものの紫を、眉が透き、鼻筋

が白く通つて、優やさ睨にらみで凜りんとした。

花咲かば告げむと

いいし山寺の

使は来たり、馬に

鞍

くらまの山のうず

桜……

ふと、前刻さつきの花道を思い出して、どこで覚えたか、魔除まよけの呪じゆのように、わざと素よみの口の裡うちで、一ひと歩あし、二ふた歩あし、擬宝珠ねいぼうしゆへ寄つた処は、あいてはどうやら鞍馬の山の御曹子おんぞうし。……それよりも楠くすのき氏の姫が、田舎いなかざむらい武士をなぶるらしい。——大森彦七——  
 傍そばへ寄ると、——便びんのういかがや——と莞爾にっこりして、直ぐふわりと肩にかかりそうで、不気味ふきみな中うちにも背がほてつた。

「やあ、洒落しやれてるなあ。」

——そのころは、上野の山で、夜中まだ取締りはなかつたらしい。それでも、板屋漏る燈ともしびのように、細く灯ともして、薄く白い煙を靡なびかした、おでんの屋台に、車わかいしゆ夫が二人、丸太を突込つっこんだように、真黒まっくろに入っていたので。

うらやま

「羨しいようですね……串戯じようだんじゃない、道理こそ。——来て

ごらんなさい、こちらの、西側へ俣くるまを廻わしたのが、石段下に、変はるかに遙な谷底で、熊が寝ているようですから。」

「動物園かてあるいうよつて、密そつと出て来やはりしめえんか、おそろしな。」

と、欄干ぞいに、姫ぎみ、お寄りなされたが、さして可恐こわくはなさそうぞうで。

「ほんに、谷底のようで靄もやが深うおすな、前刻さつきの階はしご子段だん思出したら、目がくらくらとするようえ。」

白い片掌かたてを田舎武士の背にあてて、

「あの俵がひとりでに、石段を、くるくるまいもうて上つて来たら、どないしよ、……火の車になっておそろしかろな。」

「お絹さん、そんなことをいうもんじゃあない。帰途かえりに怪我いけなもあると不可い。」

「それでも、あの段、くるくる舞うところげた時は、あて、ぱつと帯紐とけて、裸身はだかみで落ちるようにあつて、土間は血の池、おにが沢山いやはつて、大火鉢に火が燃えた。」

手を触れていて、肌をいう。大森彦七は胸うなが唸うなった。魔を退き

ようと太刀の柄……洋杖をカンとついで、

「そんなことをいうから、それ、宙に火が燃えて来た、迎いに来た、それ。」

「ああれ。」

闇を縫つて、くるくると巻いて来る、火の一点あり。事実、空

間に大きく燃えたが、雨落に近づいたのは、巻苘で、半被

股引真黒な車夫が、鼻息を荒く、おでんの盛込を一皿、

銚子を二本に硝子盃を添えた、赤塗の兀盆を突上げ加減に欄

干越。両手で差上げたから巻苘を口に預けたので、煙が鼻に沁む

顰め面で、ニヤリと笑つて、

「へい、わぎツとお初穂……若奥様。」



「馬鹿な。」

「ちよつと、手をお貸しなすつて。」

「馬鹿な、お初穂もないもんだ。いい加減おみつてるじゃないか。」

「へへへ、煮加減にえかげんの宜い処よろしと、お爛かんをみて、取のけて置きましたんで、へい、たしかに、その清らかな。」

「馬鹿な、おなじ人間だぜ、くいものは、つつくるみだ。そんな事はかまわないが、大丈夫かい、あとで、俵は？」

「自動車の運転手とは違います、えへへ。駕籠かご昇かきと、車夫くるまやは、建た場てばで飲むのは仕来りです。ご心配なさらねえで、ご緩ゆつくり。若奥様に、多分にお心付を頂きました。ご冥加みょうがでして、へい、どうぞ、

お初穂を……」

お絹が柔順すなおに、もの軟やわらかに取上げた、おでんの盆を、どういふものか、もう一度彦七がわざとやけに引取つて、

「飛んだお供物、狒ひひ々にしやがる。若奥様は聞いただけでも、禿はげやしろ

祠いけにえで犠牲を取つたようだ。……黒門洞播鉢大夜叉くろもんどうすりばちおおやしやともいふかなあ。」

縁に差置いた湯気の立つおでんの盆は、地図に表示した温泉の形がある。

椎しいの葉にもる風流は解しても、鯛いわしのぬたでないばかり、この雲助の懐石には、恐れて遁にげそうな姫ぎみが、何と、おでんの湯気に向つて、中腰に膝を寄せた。寄せたその片褌かたづまが、ずるりと前

下りに、前刻さつきのまままで、小袖幕ほころの綻びから一重桜が——芝居の花道の路之助のは、ただこれよりも緋が燃えた——誘う風にこぼる風情。

——実は帯を解いて、結び直す間がなかった、茶屋が立籠んだからなので。——あれから、直ぐにその茶屋へ引上げて、吸物一つ、膳の上へ、弁当で一銚子並べたが、その座敷も、総見ひかえの控どころで、持もの、預けもの沢山に、かたがた男女の出入ではいりが続いたゆえ、ざつと夕餉ゆうげを。……銚子だけは手酌でかえた。今夜は、まず引上げよう、乗ものを、と思う処へ、番頭津山が急いで出て、もうお俵くるまは申しつけました……という、客あつかいに馴なれたもの。急所おそを圧おさえてこっちからは乗出させぬ。ご都合まで、ご存分な処

まで、は、は、は、と口をおさく壓えて笑うと、お絹が根岸のあいかわかん藍川館  
 — 鶯谷へ、とこの人の口でいうと、町が嬉しがって、ほう、と  
ほほえ微笑んで鳴きそうに聞えた。寂しい処でございませぬ、境さん—  
 —これはお送り下さらないではなりませんまい。……勿論。

京では北野へ案内のゆかりがある。切通しを通るまえに、湯島  
 ……その鳥居をと思つたが、縁日のほかのかみもうで神詣、初夜すぎて  
 はいかがと聞く。……みぶ壬生の地蔵に対するものは、この道順にち  
 よつとない。

そこで、どこよりも清水だつたが、待つた、待つた。広小路の  
 数万の電燈、もや靄の海の不知火をしらぬい掻分けるように、前の俵を黒門前  
 で呼留めて「上野を抜けると寂しいんですがね、特に鶯谷へ抜け

る坂のあたり、博物館の裏手などは。」

「寂しいところ行きたい、誰も居やはらんとこ大好きです。」すか  
し幌ほろの裡なかから、白木蓮はくもくれんのような横顔なのです。

「大事ないどすやろえ、お縁の……裏の処には、蜜柑みかんの皮やら、  
南京豆なんきんまめの袋やら、掃き寄せてあつたよつてにな。」

「成程、舞台傍わきの常茶店では、昼間はたしか、うで玉子なども売  
るようです。お定りの菘こん蕪にやくに、雁がんもどき、焼豆腐と、竹輪な  
どは、玉子より精進の部に入ります。……第一これで安心して、  
煙草が吹かせる。灰もマツチ殻も、盆へ落すと。……よくない奴  
だ。——これはどうもお酌は恐縮、重ねては、なお恐縮、よくな

い奴だ。」

巻まきたばこ 蓆コップと硝子盃おさを両手に、二口、三口重ねると、

茶屋の酔を、ぱつと誘った。

「さあ、お酌を——是非一口、こういうことは年代記ものです。」

お絹も、心ばかり、ビイドロの底を、琥珀こはくのように含んで、吻ほっと呼吸いきしたが、

「ああ、おいし……茶屋ではな、ご飯かて、針を呑むようどしたえ。ほんに、今でも、ひざのそこ、ぶるぶると震えるわ、菟藟うろうろほんのようどすな。」

もう一口。

「あの、これから場所へいうて、二階の上り口へ出ましたやろ。」

下に大きな人大勢やよつて、ちよつと立留まつて覗く<sup>のぞ</sup>ようにするとな、ああ、灯が点れかけの暗さが来て、逢魔<sup>おうま</sup>が時や思うたらな、路之助はんの幟<sup>のぼり</sup>が沢山<sup>たんと</sup>、しんなり揃う青い中から、大きい顔が出てな。」

「相撲のだね。」

「違います、女子<sup>おなご</sup>はんの。」

「……………」

「口をばこないにして。」

と結んだ唇を、おくれ毛<sup>すげ</sup>が淒く切つた、黒い蝶が不意に飛んだように。

「可<sup>こ</sup>恐<sup>わ</sup>い顔をして睨<sup>にら</sup>みはつた。それがな、路之助はんのおかみは

んえ。」

「路之助？……路之助の……」

立女形たておやま、あの花形に、蝶蜂の群衆たかつた中には交らないで、ひとり、東髪たばねがみの水際立った、この、かげろうの姿ばかりは、独り寝すると思つたのに——

請う、自惚うぬぼれにも、出過ぎるにも、聴くことを許されよ。田舎武士は、でんぐり返つて、自分が、石段を熊の上へ転げて落ちるおもい思がした。

「何もな、何も知らんのえ、私路之助あてはんのは、あんたはん、ようお馴染なじみ染の——源太はん、帯が弛ゆるむ——いわはつた妓ひとどすの。それをば何やかて、私にして疑やはつてな、疑やはるばかりやおへ



ん、えらいこと怨みやはる。

……よつて、お客はんたちに分れて、一人で寝るとな——藍川館いうたら奥の奥は、鉄道線路に近うおすやろ。がツがツ響がして、よう寝られん、弱つて、弱つて、とろりすると、ぐウと、緊めて、胸倉とつて、ゆすぶらはる、……おかみはんどす。キヤアいうて、恥かし……長襦袢で遁げるとな、しらがまじりの髪散らかいて、般若はんげの面して、目皿にして、出刃庖丁や、撞木しゅもくやないのえ。……ふだん、はいからはんやよつて、どぎついナイフで追っかけはる。胸かて、手かて、揉み、悶もだえて、苦しして、苦しして、死ぬるか思うと目が覚める……よつて、よう気をつけて引結ひきゆわえ、引結だてまきえしておく伊達巻も何も、ずるずるに解けてしもうて、たら

たら冷い汗どすね、……前刻さつきはな夢でのうて、なおおそろしておそろして。」

それで、あの、階子段はしごだん——

今度は大森彦七が踏みこたえた。

「神経だ、神経ですよ。」

誰でもこの場は知識になる。

「しかし、どうだか、その路之助一件は、事実なのでしょう。誰でもこの場は凡夫になる。」

「つらいこと。」

と、斜ななめにそむいて、

「あんたはんまで、そない言わはる、口惜くやしいえ。」

「が、しかし、つらいでしょう。」

たばこ  
莩を捨てて硝子盃コップを取って、

「そんな時は、これに限る。あつかん熱燭をぐつと引っかけて、その勢いで寝るんですな。ナイフのちよう一挺なんぞ、だいかぐら太神楽だ。小手しらべの一曲さ。さあ、一つ。」

「やどへ行て。」

「成程。」

「あんたはん、のましてくりやはりますか。」

「飲ませますとも。」

「嬉しいな、段で、抱いてくれやはった時から、あんたはんは生いのち命の親どす。」

真顔で、こうまでいわれたのには、酒が支えた。胸の澄まない事がいくらある……

「お言ことばで痛み入る。」

と、もう一息ぐつと呻あおつて、

「——実は串じょうだん戯だだけれどもね、うつかり、人を信じて、生命いのちの親などと思つては不可いけません。人間は外そとづら面づらに出さないで、どういふ不ふり了り簡けんを持っていないとも限りません。

こういう私ですがね、笑い事じゃあるけれども、夢で般若くぜつが追廻まわすどころか、口で、というと、大層くぜつ口説くぜつでもうまそうだ。そうじゃない、心で、お絹きぬさんを……」

「私をええ？」

「幽霊にしましたよ。ご免なさいよ。殺した事があるんだから。」

「あんたはんがな。」

前髪がふつくり揺れて：差俯さしうつむ向く。

「本望どすな。」

と莞爾にっこりして、急に上げた瓜核うりざね顔が、差向いに軽く仰向あおむいた、

眉の和やかさを見た目には、擬宝珠が花の雲に乗り、霞がほんのりと縁を包んで、欄干が遠く見えてぼうとなつた。その霞に浮いて、ただ御堂の白い中に、未開紅なる唇が夜露を含んで咲こうとする。……

「あれえ。」

声を絞ると、擬宝珠の上に、円鬚まるまげが空ざまに振られつつ、

「蛇が、蛇が。」

「何、蛇が。」

「赤い蛇が。」

赤い蛇は、棲つまの乱れた、きみの裾のほかにあるものか。

「膝が震えて、足が縮む……動けば落ちようし、どないしよう。」  
と欄干に、わなわな。

「今時蛇が、こんな処へ。……不忍の池には白いのがいるという  
が。」

と、わざと落着いたが、足もとほうろつきながら、外がい套とうの袖  
で、背うしろ後ご状さまにお絹を囲った。

「額の、額の。」

ああ、幽かすみに見ゆる観世音の額の金色こんじきと、中を劃しきつて、霞の畳まる、横広い一面の額の隙間から、一ひとすじ条たらしと下つていた。

「紐だ、紐ですよ。何かの。」

勇を示して、示しついでに、ぐい、と引くと、

「あれ、……白い顔。」

声とともに、くなりと膝をついたお絹が、背後うしろから腰につかま  
つた。

「上から覗のぞかはる……どうしようねえ。」

お聞きづらかろうが、そういつた意味で、身震いをする勢いが手伝つて、紐に、ずるずると力が入ると、ぎ、ぎ、ぎ、と摺すれて、この場合——ごみも埃ほこりもいってはおられぬ。額の裏から、ばさり

と肘ひじに乗ったのは、菅すげ笠がさです。鳩の羽より軽かったが、驚くはずみの足踏に、ずんと響いて、どろどろと縁が鳴ると、取とり縄すなつた手を、アツと離して、お絹は、板に手をつけて、真俯まうつむ向けになりました。

おでんの膳ぜんなぞ一ひと跨またぎに、今度は私の方が欄干へ乗出して、外套を払った。かすりの羽織の左の袖で、その笠の塵ちりを払ったんです。一目見ると分ったのです。女の蒼白く見えたのは、絵の具です。彩色なんです。そうして、笠に描いたのは、……朝顔——

「朝顔？」



## 五

ここに写し取る今は知らず。境の話を聞くうちは、おでん爛かんざ  
 酒けにも酔心地に、前中、何となく桜が咲いて、花に包まれたよ  
 うなかきつ気がしていたのに、桃とも、柳ともいわず、藤、山吹、杜  
 若ぼたでもなしに、いきなり朝顔が、しかも菅笠に、夜露に咲いた  
 ので、聞く方で、ヒヤリとした。この篇の著者は、そこで、境に  
 聞ききかえ反したのであった。

「朝顔？」  
 と。

六

「——その時から、やがて八九年前になります——山つづきといつても可い——鶯谷にも縁のありますところに、おおのきもとくさ大野木元房という、うたよみ歌人で、またえかき絵師さんがありまして、大野木夫人、元房の細君は、私の女友だち……友だちというよりおなじ先生についた、いわば同門の弟子兄妹……」

こう話しかけた、境辻三の先師は、わざと大切な名を秘そう。人の知った、大作家、文界の巨匠である。

……で、このうたよみ歌人さんとは、一年前、結婚をしたのでしたが、なこうどお媒酌人も、私どもの——先生です。前から、その縁はあるので

すけれども、他家のお嬢さん、毎々往来をしたという中ではありません。

清瀬洲美さんというんです。

女学校出だが、下町娘。父親は、相場、鉾山などに引かかって、大分不景気だったようですが、もと大蔵省辺に、いい処を勤めた、退職のお役人で、お嬢さん育ちだから、品がよくちよつと権高なくらい。もつとも、十八九はたちごろから、時々見た顔ですから、男弟子に向つては、澄ましていたのかも知れません。薄手で寂しい、眉の凜とした瓜核顔の……佳い標致。

申すのを忘れますまい。……さしあたり、……のちの祇園のお絹を東京にしたような人だったんです——いや、どうも、若氣の

過失あやまり、やがての後悔、正面、あなたと向い合つては、慙愧ざんきのいたりなんですが、私ばかりではありません。そのころの血気てあいな徒は、素人も、堅気、令嬢ごときごときは。……へん、地者じもの、と称となえた。何だ、地ものか。

薬でも、とろろはあやまる。……誰もご馳走をしもせぬのに。

とうとい処女じねんじよを自然薯たです扱かつおい。蓼酢たですで松魚かつおだ、身が買えなけりや

塩もで揉もんで蓼かじだけ噛かじれ、と悪い虫めら。川柳にも、(地じおんな女なを振

りも返らぬひとさかり一盛ひとさかり。)そいつは金子かねを使ったでしょうが、こつ

ちは素寒貧すかんびんで志を女郎に立てて、投げられようが、振られよう

が、赭熊しゃくまと取組とつくむ山童やまわろの勢いですから、少々薄いのが難だけ

れど——すなおな髪を、文金で、打上つた、妹弟子いもうとごときものは、

眼中になかったのです。

お洲美さんが、大野木に縁づいたのは二十二の春——弥生ごろ  
 だったと思います。その夏、土用あけの残暑の砌みぎり、朝顔に人出の  
 盛んな頃、入谷いりやが近いから招待されて、先生も供で、野郎連中六  
 人ばかり、大野木の二階で、蜷しじみ汁じる、冷豆ひや府やつこどころで朝振舞  
 がありました。新夫人……はまだ島田で、実家さとの父が酒飲みです  
 から、ほどのいい爛かんがついているのに、暑さに咽喉のどの乾いた処、  
 息つきとはいつても、生意気な、冷酒ひやざけを茶碗で煽あおつて、たちま  
 ちふらふらものになって、あてられ気味、頭を抱あおえて蒼あおくなつた  
 処を、ぶしつけものと、人前の用捨はない、先生に大目玉をくら  
 っつて、上げる顔もなかった処を、「ほんの一口とおいいなさいま

したものを、私がつかりもり過ぎて」と妹分の優しい取なし。それさえ胸先に沁しみましたのに、「あちらでおやすみなさいまし。」……次ぎの室まへ座を立たせて——そこが女作家の書齋でした。が。

蚊がいますわ、と団扇うちわで払って、丸窓を開けて風を通して、机の前の錦紗きんしゃのを、背に敷かせ、黙って枕にさせてくれたのが。

……

今更ひいきぶん鼻肩分ひいきぶんでいうのではありません、——ちよツ、目力めか（助）

編へん輯しゅうめ、女の徳だ、などと蔭で皆憤懣ふんまんはしたものの、私た

ちより、一ひとあし歩あしさきに文名を馳はせた才媛さいえんです、その文金たかまの高たかま

鬻げの時代から……

平打かんざしの簪かんざしで、筆を取る。……

銀杏いちようがえ返し、襟しまはちじようつきの縞しまはちじよう八丈、黒くろじゆす縹ひつ子の引ひつかけ帯で、

(たけくらべ)を書くような婦人も、一人ぐらい欲しいとは、お  
思おもいになりませんか、お互いに……

月夜の水にも花は咲く。……温室のドレスで、エ口えぐちのにおいを  
散ちらさなければ、文章ぶんしょうが書けないという法はうはない。

——話はちよつとそれました。が、さあ、前後ぜんごしました。後一  
年、不断、不沙汰ふさたばかり、といううちにも、——大野木宗匠おののきむねぢやうは、  
……常つね袴はかまの紺足袋こんあしぶくろで、炎天えんてんにも日ひ和より下駄うがを穿うつ。……なぜと  
いうに、男は肝かんより丈ぢやうまさり、応対おうたいをするのにも、見上みあげると、  
見下みくだろすのでは、見識けんしが違ちがう。……その用意よういで、その癖くせひよろり

と脊が高い。ねばねばと優しい声を、舌で捏ねて、ねツつりと齒をすかす、言のあとさきは、咽喉の奥の方で、おおんと、空咳からぜきをせくのをきっかけに、指を二本鼻の下へ当ててるのです。これは可笑しい。が、みつくちというんじやありませんが、上唇の真まん中が、ちよつと齒莖を覗かせて反っているのを隠すためです。言語、容体、虫が好かなくつて大嫌い。もつともそれでなくつても、上野の山下かけて車坂を過ぐる時ンば、三島神社を右へ曲るのが、赤蜻蛉あかとんぼと齊ひとしく本能の天使の翼である。根岸へ入つては自然に背く、という哲人であつたんですから、つい近間へも寄らずにいました。

郷里——秋田から微禄びろくした織物屋の息子ですが、どう間違えた



か、弟子になりたい決心で上京して、私を使つて、たつて大野木宗匠を師に仰ぎたい、素願を貫かしてもらいたい、是非、という頼みです。

頼まれた。……頼まれたものは仕方がない。しかも、なくなつた私の父がこの織物屋に世話になつた義理がある……先生の内意も伺つた上……そこで大野木をたずねたのですが、九月末、もう、朝夕は身にしますのに、羽織は衣がえの時から……質です。

ゆかた一枚、それも織つたんじやありません、北国人の鎧よろいですから、ものほしそうな瓦斯織がすおりの染縞そめじまで、安もの買の汗がにおう。こいつを、二階の十畳の広間に引見した大人たいじんは、風通小紋ふうつうこもんの単衣ひとえに、白の肌襦袢はだじゆばん、少々汚れ目が黄ばんだ……兄妹分の新

夫人、お洲美さんの手が届かないよう、悪いけれども、新郎、膏あぶらが多いとお心得下さいまし。——綾織あやおりの帯で、塩瀬紺無地の袴はかま、総くさついた、塗柄うちわの団扇うちわを手まさぐる、と、これが内にいる扮ふ装んそうで、容体が分りましょう。

鼻の下へ、例の、指を立てて、「おおん」と飲み込んでくれました。不思議な縁ですね、まだ下したぎ極ぎまりで、世間に発表はしな  
いけれども、今度、仙台の——ある一学校の名誉教授の内命を受けて、あと二月ぐらいで任に赴く。——ま、その事になりました。ちよ  
うど幸い、内弟子、書生にして連れて行こう、宜よろしくば。」……  
も何もない。願かなつたり叶かなつたり、話は思う壺へはまったのですが。  
——となりの、あの、小座敷で、あの、朝顔の、あの朝——

手細工らしい桔梗ききようの肘ひじつきをのせて、絵入雑誌を幾冊か、重ねて、それを枕にさして、黙って顔を見ると、ついた膝をひいて立ちしなに「憎らしい。」……ただ、その雑誌一冊ものなぞ、どれも皆——ろくなものではありませんが、私のかいたのが入っていたのを、後姿と一所に、半ば起きに、密そつと見た時、なぜか、冷ひ酒やざけが氷になって、目から、しかも、熱いものがほろほろと湧わきました。

時に、その人がいま出て来ません。その癖、訪れた玄関では、女中よりさきに、出迎えて、二階へ通してくれたのに、——茶を

運んだのも女中です。

庭で蟋蟀こおろぎの鳴くのが聞える。

葛つたの葉の浴衣に、薄藍うすあいと鶯うぐいすちや茶ちやの、たて縞じまお召あわせの袷羽織せうお

が、しつとりと身たけに添って、紐はつつましく結んでいながら、

撫肩なでがたを弱くすべこつた藤色の裏に、上品な気が見えて、緋色ひいろ無地の

背負しよいあげ上なまめが媚かしい。おお、紫手絡てがらの円鬘まげだ。透通すうとるような、そ

の薄化粧。

金銀では買えないな。二十三か、ああ、おいらは五になる。作

者なにかま夥間あにきの、しかも兄哥あにきが、このしみつたれじやあ、あの亭主にさ

ぞ肩身かたみが狭かろう、と三和土たつきへ入ると、根岸の日蔭は、はや薄寒

く、見通しの庭すすきに薄なびが靡なびいて、秋の雲の白いのが、ちらちらと、

青く澄んだ空と一所に、お洲美さんの頸えりに映った。

目の前にあるその姿が、二階へは来ないので。御厚意は何とも。しかし内弟子に住込ませるとまでおつしやつて下さいますと、一度（何といおう……——女史。）女史に御相談の上でありますんといかがでしょうか。「おおん」と咳せきして、「ところがね、それが妙ですよ、不思議です。——妻さいがね、今朝です——今日は境さんが見えそうな気がする、というのです。ついで、おいでになりもせぬのに、そんなことが、といいますとね、手をお出しさない、手の筋を見てあげましょう。あなたの今日の運命にも顕あらわれるから。——そういうのでね、手を見せました。……妻に、あんなかくし芸があるとは知りませんでしたよ。妻が予知して、これ

が当つて、門生志願が秋田の産、僕の赴任が仙台という、こう揃つたのに、何の故障がありますか。……お庇かげでね、おおん、お庇もおかしいですが、手の筋で、妻と握合いました。……境さん、変な話ですが、お互いに、芸術家は情熱をもつて生命として活いきるのですな。妻もご同門ではあり、芸術家です、どんなに、その愛情が灼しやく熱ねつ的てきであろうか、と期待しましたのに、……どうも冷たい。いかにも冷やかですが、稟ひん性せいのしからしむる処ですか。あるいは、あなた方、先生の教えは、芸に熱して、男女間は淡泊、その濃密こうちやく膠かく着ちやくでなく、あつさりという方針でもおあんなさるか、一度内々で、と思つた折でもありますのでして。……失礼します。……居いた堪たまらなくて、座を立つと、——「散歩を

しましよう。上野へでも、秋の夕景色はまた格別ですよ。」こつちはひけすぎの廊下ろうかどんび鳶だ。——森の夕ゆうがらす鴉などは性に合わない。

「あの、いま、そういうおうと思つていた処です。なんにもありませんが、晩のご飯を。」

まだ入れかえない葦戸よしどに立つて、夫人がほの白く、寂しそうに薄暮合を、ただ藤紫で染めていた。

その背の、奥八畳は、絵の具皿、筆おき、刷毛はけ、毛氈もうせんの類でほとんど一杯。で、茶の間らしい、中の間の真中まんなかに、卓子台ちやぶだいを据えて、いま、まだ焼海苔の皿ばかり。

みつどもえ  
三三 巴みつどもえに並んだ座蒲団を見ると、私は玄関へ立ち切れなかつ

た。

「すぐお爛かんがつきますが。境さん、さきへ冷酒ひやですか。」

「いや、断たちものです。」

と真中まんなかへよれよれの袖口を、そつとのぼして、坐ると、どう

も、そつちが上席らしい、奥座敷の方へお洲美さん。負けてはいないな、妹よ、何だか胸が熱くなる。紺はかまの袴は、入口の茶棚わき傍を勢しかい然しかるように及んで、着席です。

「牛ぎゆうが宜よろしい……書生流に、おおん。」

亭主のすきな赤烏帽子あかえぼしを指揮さしずする処へ、つくだ煮もりわを装分わけた小皿しおに添そえて、女中が銚子しよを運んで来た。

「よく、いすいだかい。」



「綺麗なお桃子。」

色絵の萩の薄彩色、今万里いまりが露に濡れている。

「妻の婚礼道具ですがね、里の父が飲酒家だからですか。僕は一滴もいけませんまい、妻はのまず。……おおん、あの、朝顔以来、内でこれの出たのはそうですね、大掃除の時、出入りの車夫くるまやに振舞うたばかりですよ。」

「お毒見をいたします。」

お洲美さんが白い手で猪口ちよくを取った。

「注いで下さい。」

大人驚いた顔をして、

「飲むのかね。」

「大掃除の時の車夫のお銚子ですから。——この方は、あの、雲助も同然の身持だけけれど……先生の可愛い弟子です。」

かねて、切れた眦めじりきつが屹として、

「間違いがあると、私が、先生に申訳がありません。」

「おおん、何か、私の饒舌しゃべった意味を取違えているようだけれど、いいさ、珍らしく飲むのも可よかろう……注ぐよ。」

「なみなみと。もう一つ。もつと、もう一度。」

齒はぎしみするように、きつきつと。

「ああ、飲んだ。」

と、もう白澄んだ臉まぶたを染めた。

「境さん、いいでしょう、上げますわ。」

「駕籠屋は建場を急いでいます、早く飲もうと思つてね。」

「おいらんのようにはいきません。お酌は不束ですよ、許して下さい。」

「こつちも駆けつけ三杯と、ごめんを被れ。雲足早き雨空の、おもいがけない、ご馳走ですな。」

と、夫人と見合つた目を庭へ外らす。

大人の頤が上つて、

「大分壮になりましたな、おおん。」

「あなた、電燈を捻つて下さい。」

牛肉もふつふつ煮えて来た。

といううちにも、どういふものか、皿に拵げた、  
一側ならべ

の肉が、鍋へ入ると、じわじわと鳴ると齊しく、箸とともに真  
 中でじゆうと消え失せる。注すあと、注すあと、割醬油はもう  
 空で、葱がじりじり焦げつくのに、白滝は水気を去らず、生  
 豆腐が堤防を築き、渠なつて湯至るの観がある。

「これじゃ、牛鍋の湯豆腐ですね。」

ふうと、お洲美さんの鼻のつまつた時は、お銚子がやがて四五  
 本目で、それ湯を、それ焦げる、それ湯を、さあ湯だ、と指揮と  
 働きを亭主が一所で、鉄瓶が零のあとで、水指が空になり、湯  
 沸が俯向けになつて、なお足らず。

大人、威丈高に伸び上つて、台所に向い、手を敲いて、

「これよ、水じゃ、水じゃ。」

## 七

が、妹分のために、苦にせまい。肉の薄いのは身代しんしよの痩やせたのではない。大人は評判の蓄財家で、勤儉の徳は、範を近代に垂るといつても可いのですから。

その証拠には、水騒ぎの最中へ、某雑誌記者、気忙きせわしそうで口早な痩せた男の訪問があり、玄関で押問答の上、二階へ連れて上ったのは……挿画さしえ何枚かの居催促、大人に取っては、地位転換、面目一新という、某省の辞令をうけて、区々たる挿画さしえごときは顧みなかったために債が迫った。顧みないにした処で、受合った義

理は義理で、退のつびき引ならず二階で、膝詰の揮毫きぎょうとなる処へ、かさねて、某新聞の記者、こちらは月曜附録とかいう歌の選の督促で一足おく後れたが、おくれただけ、なお怒ったように、階はしごだん子段を、ずぼん洋袴の割股で押上った。この肥ふとったので、二階へ蓋ふたをしたように見えました。

「流はや行るんだなあ。」

編輯、受附、出版屋、相ともに持込むばかりで、催促どころか、めつたに訪問などされた事のない、兄弟子は、夜風を横よこぞつぽ外頼へ、げっそりと腹を空かして、

「結構ですな。」

枯野へ霜がおりたような、豆腐の土手の冷たいのに、押取おっとつて、

箸を向けると、

「およしなさい。」

と酔とともに、ふらふらとかぶりを振って、

「牛鍋の湯豆腐なんか、私の御馳走ではないのですから。……あなたのお頼みなさいました、そのお弟子さんですがね、内へおいでなさるんなら、この覚悟、ね、より以上かも知れませんか。」

お葱ねぎや、豆腐はまだしも、糸蕪しらたきだと思って下さいませね。お腹が冷たくなるんですから……お酒はあります。あ、私にも飲んで頂載ひとつ。もう一杯もつとさ。」

「いや驚いた、いけますなあ。」

「一生に一度ですもの。」

「え。」

「いいえ、二度です。婚礼の晩、飲みましたの。酔いましたわ。」  
 「乱暴だなあ。しかし、痛快だ。お酌をするのも頂くのも、ともに光栄です。」

「お兄上。」

「……………」

「おほ、ほ。ああ酔った。私…………お兄上にあたる方にお酌をさして罰が当る。…………前に、あなたが、まだ、先生のお玄関にいらつしやる時分、私が時々うかがう毎たびに、駒下駄を直さして、ああ、勿体ない、そう思う、思う心は、口へは出ず、手も足も固くなるから、突張つっぱって、ツンツンして、さぞ高慢に見えたでしょう。髪



の毛一筋抜けたって、女は生命いのちにかかわります。置きどころもない身体からだを、あなたの目に曝さらすんですもの、形なりも態ふりもありはしません。文学少女とかいうものだって、鬼神に横道なしですよ。自分で卑下する心から、気がひがんで、あなたの顔が憎にくらしかつた。あなたも私が憎にくいのね。——ああ、信のぶや（女中）二階で手が鳴る。——虫むしが煩うるさい。この燈ひを消して、隣室となりのを点つけておくれな。」

その間、頸えり脚あしが白かった。振仰ふりあおむ向くと、吻ほっと息して、肩が揺れた、片手づきに膝をくねって、

「ああ、酔って来た、境さん、……おいらんとは。お睦むつまじい？……」

と、バタリと畳へ手をつくくと、浴衣の蔦つたは野分のわきする。

「何をいつてるんです。」

「おいらんは何て方？……十六夜さん、三千歳さん？」

「薄雲、高尾でございます。これでもそこらで、鮎すしを撮つまんで、笹さ

巻さまきの笹さだけ袂たもとへ入れて振込めば、立ちどころに仙台様。——庭

の薄すすきに風が当る。……

——寂しいな、お洲美さん、急に何だか寂しい気がする、仙台へ行ってしまわれては。」

「ですけどね、あの、ほかの世話はかまいませんけど、媒なこうど灼どだけは、もう止してね。」

と、眉が迫って見据えるのです。

「媒灼？」

「——名はいいいますまい、売ツ子ですよ。私たちのお弟子なかまではありません。別派、学校側の花形で、あなたのお友だちの方に——わかりまして……私を、私をよ、嫁に、妻に世話しようとなすつたのは誰方どなたでした。」

「そ、それは、しかし、勿論、何だ。別派、学校側の……可よし……：その男が、私を通じて、先生まで申出てくれと頼まれたものだから……」

「お料理屋へ私をお呼び下すつて……先生が、そのお話を遊ばしたんです。——境が橋わたしの口を、口を利いた、と一言……一言おつしやるのを聞いた時、私、私……」

「お待ちなさい、待ちたまえ。——だから断つたから差支えない

でしよう。」

「ええ、断りましたわ、誰があんな——あんな男に世話しようなんのつて、私、あなたが、私あなたが。」

「そりや無理だ、そりや無理だ、お洲美さん、あなたが、あの男を好きだか、嫌いだか、私がそれを知るもんですか。」

「だつて、だつて、ちつとでも、私を、私を思つて下すつたら、  
怪<sup>け</sup>我にもあんな、あんな奴に。」

「無理だ、そりや乱暴だ。」

「ええ、無理です、乱暴です。だから、私、すぐそのあとで、それまで人をかえ、手をかえ、話があるのを断つていた——よござんすか——私も、あなたが大嫌いな、一番嫌いな、何より好かな

い、此家へ縁付ここいてしまつたんです。ほ、ほ、ほ。」

太白の糸を嚙かんだように、白く笑つて、

「乱暴でしょう。乱暴、乱暴だけど、あの一番嫌いな人を世話しようとした、その口惜くやしさに、世話しようとした人の、あなたですよ、あなたの一番嫌いな男の許とこへ縁についた。無理です、乱暴です。乱暴ですけど、あなたは、あなただつて、そのくらいな著作をなさるじやありませんか。」

「何にもいわない。——もう、朝顔の、ま、枕の時から、一言もないのです。私は坊主にでもなりたい。」

お洲美さんは、睜みはつていた目を閉じました。そして、うなずくように俯向うつむいた耳許みみもとが石榴ざくろの花のように見えた。

「私は巡礼……」

もうこの間から、とりあえず仙台まででも、奥州を巡礼してゆきたい気がするんです。まったくですわ。そういつたら、内の女中ツたら、ねえ、あの、私のような汚きたながり屋さんが、はばかりをどうするって笑うんですの。巡礼といえは、いずれ木賃宿でしょう、野宿にしたって、それは困るわね。でも、真面目ですよ、ご覧なさい——昨日きのうも上野の浄明院石占いしうらでら寺の万体地藏様にお参りをして、五百体、六百体と、半日、日の暮方まで巡りましたらね、（水木藻蝶もぢよう。）いい名でしょう、踊のお師匠さんに違いないのです。（行年二十七）として、名を刻すんだ地藏様が一体、菅す笠がさを——ああ、暑い、私何だか目が霞む。——菅笠を。……め

していらつしやるんなら、雨なり、露なり、取るのは遠慮だった  
んですけど、背中に掛けておいでなすったもんだから、外して、  
本堂へ持つて行つて、お布施をして、坊さんに授けて貰つて来た  
んです。——これだつて女です、巡礼しても、ちつとでも、形の  
いいように、お師匠さんのを——あの、境さん、菅笠を抱きまし  
た時に、何となく、今日ね、あなたがいらつしやる気がしたんで  
すよ——そ、それに二十七だとすると、もう五年生きられますも  
の。——押入なんかしまに蔵しまつておくより、昼間はちよつと秋草に預  
けて、花野をあるく姿を見ようと思ひますとね、萩も薄すすきも寝てし  
まう、紫苑しおんは弱し。……さつき、あなたのおいでなすつた時です  
よ、ちようど鶏頭の上へ乗つて見ましたの。そうすると、それ

「ぐあいがいい工合に。」

「ああ、そうか、鶏頭か。春日かすが燈籠とうろうをつつんで、薄の穂が白く燈ひに映る。その奥の暗い葉蔭に、何やら笠を被かぶった黒いものが立っ  
つていて、ひよろひよると動くのが、ふと目に着いてから気にか  
かった。が、決意もなく、断行もない、坊主になりたいを口にし  
るとともに、どうやら、破やれごろも衣ころものその袖が、ふらふらと誘いに  
来そうで不気味だった。

「見せますわ、見せましようね。巡礼を。」

「大賛成です。」

「水木藻蝶さん、うつくしい人の面影ですよ。」

どこで脱いだか、はツとたちまち、うす鼠地に蔦つたを染めた、女



作家の、庭の臙おぼろの立姿は、羽織を捨てて、鶏頭の竹に添っていた。

軽くはずして、今、手提てさげに引返す。帯が、もう弛ゆるんでいる。さ  
みしい好みの水浅葱みずあさぎの縮緬ちりめんに、蘆あしの葉をあしらつて、淡黄うすきの  
肉色に影を見せ、蛍の首筋を、ちらちらと紅あかく染めた蹴出しの色  
が、雨をささそうか、葉裏を冷く、颯さつと通る処むすめかせ女風に、蘆も蛍も  
薄すすきに映つて、露ながら白い素足。

二階の裏窓から漏れる電燈に、片頬を片袖ぐるみ笠を黒髪かざに翳  
して、隠すようにしたが、蓮葉くつぬぎに沓くつぬぎ脱をひらりと、縁へ。

「ふらふらする。ちよつと歩あ行くと、ふらふらしますわ。酔つち  
まつて。」

と、元の座にくずれた。

「ああ私、何だか分らない。」

ふう、と仰向けあおむに胸の息づかい、乳ちの蔦つたがくれふくらの膨ふくらみを、ひしと菅笠おさで圧おさえながら、

「巡礼に御報謝……ね。」

と、切なそうに微笑ほほえんだ。

電燈うしろを背後うしろにして、襟えりのうすぐらい、胸むねのその菅笠おさが、ほんのりと、臍おぼろに白しろい。

「や、お洲美さん、失礼しつれいですが、隠かくして下さい、笠かさを透とおして胸むねが白しろい、乳ちが映うつる。」

「見えますか。」

「申まをすも憚はばかりだが、袖そでで隠かくして。」

「いいえ、いいえ。」

おくれ毛が邪慳じやけんに揺れると、頬が痩やせるように見えながら、

「嬉しい、胸が見えるんです。さ、遮るものなしに通つた、心の記念かたみに、見える胸を、笠を通して捺塗なぞつて見て下さい。その幻の消えないうちに。色が白いか何ぞのように、胡粉ごふんとはいいませんから、墨でも、渋しぶでも。」

「雪がひとつか一掴みあればいいと思う。」

「信や……絵の具皿を引攫ひっさらつておいで。」

「穏かでない、穏かでない、攫さらうは乱暴だ、私が借りる。」

胡粉に筆洗を注いだのですが。

「画工えかきでないのが口惜くやしいな。」

「……何ですか蘭竹なんぞ。あなたの目は徹とおりました、女の乳と  
いうものだけでも、これから、きつと立派な文章にかけるんです  
。」

——以来、乳とかく時は一字だけでも胡粉がいい——  
と咄とつ嗟さに思つて、手首に重く、脈にこたえて、筆で染めると、  
解けた胡粉は、ほんのりと、笠よりも掌てに響き、雪を円く、暖か  
く、肌理きめ滑らかに装もり上あがる。色の白さが夜よの陽かげ炎ろう。

「ああ、ああ、刺ほり青ものツて、こんなでしようか。」

居いずまいの乱はだるる膚くれないに、紅したの点たり滴たりは、血でない、蛍の首でし  
た。が、筆は我ながら刀メスより鋭く、双の乳房を、驚破すわ切落したよ  
うに、立てていた片膝なり、思わず、どうと尻もちを支ついた。

お洲美さんは、うつとり目を開き、膝を這つて、蹴出しを隠した菅笠に、両の白いものを視て、擦つたそうに、そつと撫でて、

「……熱いわ——この乳も酔っている……」

と、いつて寂しく微笑んだ。

「人目がありません。これでは巡礼して、肌を曝しては、あるかもしれませんね。ぽつちり薄紅を引きましたようか、……まあ、それだと、乳首に見えようも知れません。」

浅葱の絵の具を取つて、線を入れた。白雪の乳房に青い静脈は畝らないで、うすく輪取つて、双の大輪の朝顔が、面影を、ぱつと咲いた。

蔓を引いて、葉を添えた。

「うまいなあ、大野木夫人。」

「知らない。——このくらいな絵は学校で習います。同行二どうぎように

人——あとは、あなた書いて下さいな。」

「御意のままです、畏かしこまった。」

「薄墨だし……字は余りうまくないのね。」

「弘法様じゃあるまいし、巡礼の笠に、名筆が要りますか。」

「頂くわ、頂きますわ。」

と、被かぶろうとする。

「お、お待ち下さい。——二階が余り静しずかです。気障きざをいうようだ

が……その上になお、お髪ぐしが乱れる。」

「可厭いやな、そんな事は、おいらんに。」

「ああ、坊主になります。」

首を縮めた。

「ちようどいい、坊主が被<sup>かぶ</sup>つて見せましょう。」

と、魔がさしたように、いや、仏が導くように、笠を被ると、

笠の下で、笠を被った、笠の男が、笠を被って、ひとりでに、ぶらぶらと歩<sup>ある</sup>行き出したのです。

中の室<sup>ま</sup>から、玄関へ、式台へ、土間へ、格子へ。

ハツと思わず気が着いたが、

「お洲美さん、貫<sup>ゆ</sup>つて行きます。」

我知らず声が出ました。

「あれ、奥様。」

女中が飛出す。

お洲美さんは、式台に一段躓つまずきながら、褌つまを投げて、障子の棧すがに縫すがったのでした。

ぶつぶつと、我とも分かず、口の裡うちで、何とも知らず、覚えただけの経文を呟つぶやき呟つぶやき、鶯谷から、上野の山中を徜徉さまよつて歩行あるいた果はてが、夜ふけに、清水の舞台に上った。そうして、朱の扉の端ノオトに片よせて、紅緒べにおをわがね、なし得る布施を包んだ手帖ノオトの引きほぐしに、

大慈のおん心にまかせ三界迷離の笠いちがい蓋がい  
 よしなにおん計はからいのほど奉ねがいあげたてまつり願ねがいあげたてまつり上そうろう候

……夜よ巡



礼者

当御堂　お執事中

礼拝

舞台を下りると、いつか緒の解けたのが、血のように絡<sup>ま</sup>わって、生首を切つて来たように見えます。秋雨がざつと降つて来る。：震え、震え、段を戻つて、もう一度巻込んで、それから、ひた走りに、駆出しましたが。

お洲美さんは——水木藻蝶の年も待たず、三年めに、産後<sup>はかな</sup>で儂<sup>な</sup>くなりました。

「その紅緒なんです。その朝顔の笠、その面影なんです。——」

## 八

「——お絹さん、宿へ行つて話しましょう。——この笠に、深いわけがあるんですから。」

「そしたら、泊っておくれやすえ、可こ恐わいよつて。」

「大きに。」

お洲美さんの思出のために、目の前の誘惑に対する余裕が出来て、と、軽く受けて、……我ながらちよつと男振を上げながら、

夜露も身に沁しむ、袖で笠を抱きました。

「旦那、帰つてもいいんでござんしょう。」

藍川館の玄関へ引込んだ時、酔つた車夫がくるまやニヤニヤと声を掛けた。

「ほんに。」

「いや、一台は、そのまま。ほろ幌は掛けたまま頼むよ。」

笠を預けて出たんです。が、今おもつても、冷汗が流れます。

この俵くるまをかえしていたら、何の面目があつて、世にお目に掛かられよう。

見て下さい。——曲りくねつた長い廊下を、そうでしょう、す

ぐ外は線路だという、奥の奥座敷へ通つて、ほとんど秘密室とも思われる。中は広いのに、ただ狭い一枚襖いちまいぶすまを開けると、どうです。歓喜天の厨子ずしかと思う、綾錦あやにしきを積んだ堆うずたかい夜具よぐに、ふつくりと埋うずまって、暖かさに乗出して、仰向けあおもむに寝ていたのが、

「やあ。」

という、

枕が二つ。……

「これはおいでなさい。」

眉の青い路之助が、八反たんの広袖どてらに、桃色の伊達卷だてまきで、むくりと起きて出たんですから。

「遅いので、何のおもてなしも。……さ、さ、蜜柑でも。」

片寄せた長火鉢の横で、蜜柑の皮。筋を除る、懐紙の薄いのが、しかし、蜘蛛の巣のように見えた。

「——そうですか、いずれ明日。——お供を……」

「いや、待たせてあります。」

路之助は、式台に、色白くその伊達巻で立った。

お絹が廂を出て、俵の輪に摺り寄つた処を、

「握手をしますよ。」

半身を幌から覗くと、

「は、は、は、どうぞしつかり。」

「さようなら。」

「お静かに。」

「ああ、お洲美さん。」

万一、前刻さきに御堂の縁で、唇を寄せたらば、恥辱ちじゆくに活いきてはいられまい。――

「お洲美さん、全く、お庇かげだ。お洲美さん。」

「旦那、どうか、なさいましたか、旦那。」

「うむ。」

踏切の坂を引ひきあげて、寛永寺横手の暗夜やみに、石燈籠に囲まれつ  
つ、轍わだちが落葉くさに軋きしんだ時、車夫くるまやが振向いた。

「おんな  
婦の友だちだよ。」

「旦那。」

車夫は、藍川館まで附絡つきまとった、美しいのに遁にげられた、色いろ

情狂ちがひだと思つたらう。……

「うつくしい、儂はかない人だよ。私の傍そばに居るようだ。」

「ぎやあ。」

「ついでおろしておくれ、山の中を巡礼がしたくなつた。」

「降り出しましたぜ、旦那。」

「野宿をするのに、雨なんぞ。……あなたは濡らさない、お洲美

さん。」

「わあ、大きな燈籠の中に青い顔が、ぎやあ。」

俥を棄てた。

術をもって対すれば、俳優何するものぞ。ただしその頃は、私に台本、戯曲を綴つづる気があつた。ふと、演出にあたって、劇中の

立女形たておやまに扮するものを、路之助として、技の意見、相背き、相あ衝いっついて反する時、「ふん、おれの情婦いろともしらないで。……何、人情がわかるものか。」と侮蔑されたら何とする?!……

「ああ、お洲美さん、ありがとう。」

と朝顔の笠を両袖で——外套は宿へ忘れて来た——袖でひしと抱いて、桜を誘う雨ながら、ざつと一しきり降り来る中に、怪しき巨人に襲われる、森の恐怖にふるえつつも、さめざめと涙を流した、石燈籠が泣くように。……

昭和七（一九三二）年四月







# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成<sup>8</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日発行

初出：「週刊朝日 第二十一ノ十六号（春季特別號）」

1932（昭和7）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年10月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白花の朝顔

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>